

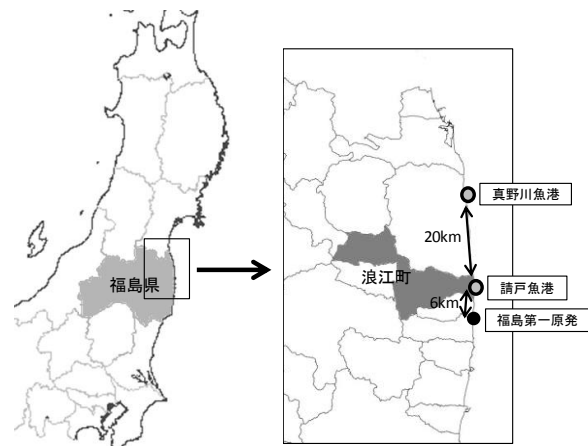
うお  
魚よし手間なし鮮度よし

底建網精鋭部隊で請戸の未来を守れ!

相馬双葉漁業協同組合請戸地区青壮年部  
鎌田 寛典

### 1. 地域の概要

相馬双葉漁業協同組合請戸地区は、福島県沿岸のほぼ中央にある浪江町に位置している(図1)。震災と東京電力福島第一原子力発電所事故の影響で、浪江町にはいまだに住民が帰還することができず、請戸地区は福島県の中でも復旧が遅れている。私たちは、現在、請戸漁港から約20km離れた南相馬市鹿島区にある真野川漁港に一時的に拠点を移し、試験操業に従事している。



### 2. 漁業の概要

東日本大震災(以下、震災)前は刺し網や船びき網など小型船による沿岸漁業を営んでおり、震災前の平成22年の水揚げは、コウナゴ、シラス等の浮魚やヒラメ・カレイ類等の底魚など、数量が2,370トン、金額が7億4,000万円であった。震災前の請戸地区の正組合員数は156人であったが、現在は125人まで減少している。小型船隻数は97隻があったが、津波によりほとんどの船が流失してしまった。現在、福島県海域では東京電力福島第一原子力発電所から半径20km圏内の操業を自粛しており、請戸の漁場はほとんどがその範囲内にある。東京電力福島第一原子力発電所事故(以下、原子力災害)により本格操業の見通しが不明中、漁船復旧に躊躇する漁業者も多く、現在の小型船隻数は25隻にとどまっている。平成25年3月から船びき網等の試験操業に参加し、漁業の本格的な再開を目指している。

図1 福島県浪江町の位置

### 3. 研究グループの組織と運営

請戸地区青壮年部は、漁業後継者を中心に17人で組織している。震災直後は皆県外などに避難し、バラバラの状況であったが、福島県内で試験操業が始まるにつれて、部員たちも港に集まるようになった。現在は、試験操業に従事する8人が中心となり、青壮年部活動として先進地域の視察、イベントに参加しての産直活動、担い手の育成研修などを実施している。さらに、平成26年に請戸底建網検討委員会を立ち上げ、青壮年部長が委員長となり、底建網の効果を検証する活動を実施している。

#### 4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

請戸地区は東京電力福島第一原子力発電所から約 6km の距離にあり、福島県の中でも原発事故の影響を大きく受けた地域である。試験操業が行われているとはいえ、請戸の漁業者は震災前の 85% に減少し、漁船は 4 分の 1 まで減ってしまった。浪江町はいまだに住民の帰還が出来ず、いつ請戸に住めるようになるか分からない状況にある。請戸の漁業者の中には、家族が県外などの遠くに避難している者も多く、将来、請戸で水揚げが再開されたとしても、選別などの作業を家族に頼める保証はなく、「このままでは請戸の漁業の未来が危ない」と、誰もが危機感を募らせていた。

そんな矢先、北海道で新造船を建造し、回航の途中で青森県の大畑町を訪れた時、福島県では見慣れない漁法が目飛び込んできた。地元の方に聞いてみると、それは底建網という定置網の 1 種であり、専用の船を使えば最低 2 人で網が起こせ、多様な魚種が漁獲されるとのことだった。福島県ではサケを狙う定置網漁は行われていたが、底建網は今まで取り組んだことがなかった。今までは将来に対し悲観的なことばかり考えていたが、底建網と出会ったことで「これを使えば、少ない人数でも市場を満たす魚が獲れるかもしれない。将来、請戸の漁業の灯を消さずに済むかもしれない」と、何か予感めいたものを感じた。請戸の将来を思う気持ちは皆同じであったが、特に若い世代の者たちは、より強い思いを抱いていた。そこで、請戸の将来を担う若い青壮年部が立ち上がり、底建網の導入に向けた漁獲調査を行うことにした。

#### 5. 研究・実践活動状況及び成果

##### (1) 視察研修

底建網漁は福島県では前例のない漁法であったため、部員の中に網の構造や仕組みについて理解している者が誰もいなかった。そこで、まずは北海道立漁業研修所を訪れ、展示されている本物の底建網を見学し、網の構造を勉強した(図 2)。さらに、底建網漁の特徴や仕組みについて講義を受け、基本的な事柄を頭に入れた。

次に、青森県大畑漁協と佐井村漁協の協力を得て、実際の底建網漁に同行させてもらい、漁の方法を確認した(図 3)。そこでは、底建網専用のブリッジのない船を使用しており、2~3 人の乗組員のみで揚網作業を行っていた。引き揚げた網の中には活きの良いヒラメやカレイ類が入っており、ざっと見ただけでタル 10 本分くらいの量になりそうであった。これだけの魚が獲れるのにもかかわらず、



図 2 視察研修の様子 (漁具見学)



図 3 視察研修の様子 (底建網漁体験)

船上での作業時間はわずか20分ほどであった。しかも、網外し等をする必要が無いため、陸に戻ってからの作業は、獲ってきた魚を活魚槽に移すだけである。大畑漁協の方によると、この日の水揚げ金額は、1網あたり20万円程度であり、これでも少ない方とのことで、わずかな作業でこれほどの金額になるのは驚きであった。

「この水揚げ量があれば、あえて手間のかかる刺し網をやらなくても、十分漁業が成り立つ」底建網漁を体験し、私たちが抱いていた予感は確信に変わった。「底建網を使えば、家族の力を借りなくても、われわれだけで漁業を続けられる」視察研修を終えて、改めて底建網にチャレンジする決意が固まった。

## (2) 調査準備

青森県の視察を経て、請戸で底建網を設置するイメージをつかむことができたため、私たちは早速、網を導入する手配を始めた。当初、新品の網を購入するための資金の工面に苦慮していたが、そんな中、研修先の大畑漁協の厚意により、中古を安く譲ってもらえることになった。また、底建網を福島県海域で実施するのは初めてだったため、県の担当者と話し合いを重ね、当面の間、「漁具調査」を目的とした特別採捕許可により実施することになった。これで調査に必要な全ての準備がようやく整った。

平成27年4月に、私たちの本拠地である請戸の漁場において実際に網を設置し、漁獲調査を開始した。請戸は磯が多い漁場であるが、ちょうど底建網1基を設置するのに適した砂場が広がっている場所を見つけ、そこに、網を設置した。初めて網を入れる時には、大畑漁協の杉本船主会長がわざわざ福島まで足を運んでくれて、一緒に船に乗り込み、細かな作業やテクニックを教えてくれた。杉本会長は、元々全くの部外者であった私たちの取組を応援してくれて、相談事に親身になって応じてくれた。杉本会長には心の底から感謝している。

## (3) 1年目の挑戦

3日間網を入れた後、いざ、意気揚々と網を引き揚げたのだが(図4)、1回目の漁獲物はマコガレイが6kg、ヒラメが4kg、カスベが2kg程度であり、期待していたような成果ではなかった。その後も何回か網を引き揚げたが、イメージ通りに網が張れていなかったためか、思うように魚が獲れない日が続いた。底建網調査は早くも暗礁に乗り上げてしまった。従来、私たちが得意とする「船びき網」等の漁法であれば、魚が獲れない時は、何が原因か見当をつけ、対策を打つことができる。しかし、底建網は経験がないため、どこが原因なのかよく分からなかった。



図4 揚網の様子

そこで私たちは、試行錯誤して部員同士で活発に意見を出し合い、原因を探るとともに、杉本会長から教わった技術の一つ一つを見直すことにした。まず私たちは、知り合いのダイ

バーに頼んで、水中の網の様子を見てきてもらうことにした。すると、網が海底から少し浮いていることが分かり、その箇所に重りを追加することにした。さらに、杉本会長の「底建網で大切なのは、あば網にしっかりテンションをかけて、網のたるみを無くすこと」という言葉を思い出し、実行してみることにした。基本中の基本なのかもしれないが、初めての作業であったためその辺の感触が分かっていなかったのかもしれない。その後も作業で改良できそうな点を見つけては、その都度やり直した。私たちの行動が正解かどうか分からず、皆不安を抱えながら作業を続けた。

4回目のチャレンジとなる11月の調査で、ようやく待ちに待った瞬間が訪れた。マアジが300kg(タル10本)と大量に獲れたのである。ようやく努力が報われたと感じ、同時に確かな手応えをつかむことができた。

#### (4) 2年目の挑戦

2年目となる平成28年の調査では、皆作業にも慣れてきて、スムーズに網を設置できるようになり、ヒラメが狙い通り獲れるようになった(図5)。5月から6月にかけて実施した計6回の調査では、1回あたり平均で228kgのヒラメが漁獲された(表1)。6月27日の調査を例にすると、4日間網を漬けた後に揚網し、漁獲物・漁獲量はヒラメが250kg(タル8本)、マアジが30kg、マサバが20kgであった。これは、震災前の刺し網5隻分に相当する水揚げ量であった。



図5 漁獲されたヒラメ活魚

これらの調査結果から、底建網は安定的な漁獲が見込めそうだと考えられた。ただし、ヒラメが多く獲れるのは、震災後に資源が増加しているからだとも考えられ、今後、資源が変動した際は、現在のような漁獲量を維持できるとは限らないかもしれない。

しかし、底建網には「漁獲量」という指標以外にも、他の漁法にはないメリットがあると考えている。

1点目は、何と言っても獲れる魚が新鮮で、なおかつ、魚体に傷がないという点である。漁獲される魚は全て生きている。刺し網のように網に絡めて獲る漁法ではないため、魚体には傷も付かない。新鮮な魚を獲れることは漁師にとって最大の武器である。

2点目は、作業時間が少ないという点である。私たちの底建網調査における船上作業時間は30~40分程度である。網の設置作業や撤去作業が加わればもっと時間がかかるが、漁期中は基本的に網を設置したままである。また、刺し網のように揚網してから網外し等の作業がない。漁労作業を軽減できることは、将来若い担い手が入ってきたときに漁業に対する門戸を広げることになるし、逆に、高齢の漁師でも漁を永く続けられるはずである。

3点目は、資源を無駄にしないという点である。先ほども述べたように、魚が全て生きているので、価格の高い魚種や大きい魚だけを船上で選別し、残りはその場で放流するこ

とができる。福島県海域は震災後に資源量が増加している。魚は私たち漁師の生活の糧であり、せっかく増えた魚をやみくもに獲って減らしてしまったのでは、自分たちの将来を自ら壊しているようなものである。底建網は、資源を守りながら続けられる漁業だと考えている。

表1 平成28年度調査結果（漁獲量）

	H28					
	5月26日	5月31日	6月6日	6月10日	6月23日	6月27日
ヒラメ	200	250	290	180	200	250
サバ	100	30	1	10	-	20
マアジ	1	5	1	10	-	30
マトウダイ	20	3	3	10	5	1
マコガレイ	6	3	10	5	-	2
コモンカスベ	10	1	5	5	20	1
ホウボウ	-	1	5	2	1	3
クロソイ	1	1	1	1	1	-
ニベ	-	-	-	-	30	-
シログチ	3		-	-	-	-
イシガレイ	-	-	7	-	-	-
その他	4	2	2	3	9	3
合計	345	296	325	226	266	310

## 6. 波及効果

2年間の調査を通して、「この漁法なら請戸の市場を満たせる魚が獲れる」と思えるようになった。底建網という強力な武器を手にしたことで、私たちは請戸地区青壮年部として共通の目標を持つことができるようになった。それは、「近い将来請戸に戻り、底建網を使って請戸の漁業を復活させる」ことである。目指すべき姿が明確になったことで、部員同士の結束力も一段と高まっている。

さらに、私たちが始めた底建網の取り組みに、最近では地区のベテラン漁師たちも高い関心を示すようになった。底建網は手間が少なく、作業効率が良い漁法であるため、彼らにとっても大きなメリットがあるのである。最近と一緒に調査に同行してもらい、そこで底建網漁に従事することでその魅力を実感していただいている。底建網を中心として、今までにないほど請戸地区全体の一体感が生まれてきていると強く感じている。

## 7. 今後の課題や計画と問題点

これまでの調査によって、少ない労働力で、新鮮な魚を十分に漁獲できることを確認することができたが、調査地点が1カ所のみに限られている。請戸海域は磯が点在しているため、他の調査地点を探るのが難しいが、今後、底建網による操業を目指すうえで、複数の地点における漁獲状況を調査し、十分なデータを重ねることで底建網の有効性を証明できると考えている。

また、現在は調査という形で底建網を実施しているため、入網した魚は全て放流しているが、目指すところは底建網で実際に試験操業を実施し、魚を水揚げし、おいしい魚を消費者に届けることである。今は、底建網による試験操業は実施されていないので、今後は

関係者が一丸となって底建網試験操業の着業に向けて努力していきたい。

私たちは、将来請戸が元通り復活し活気ある街が戻る日を信じて、これからも活動を続けていく、「請戸の未来は自分たちの手で創る！」これが私たち請戸地区青壮年部の決意である！